

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点20点）

音楽とは不思議なものである。「潤いをあたえる」という言葉がほんとうにぴったりくるほど、ささくれた心、渴いた心、落ち込んだ心を慰撫<sup>いぶ</sup>してくれる。文字どおり、撫<sup>な</sup>でるように、肌にそっと触れるようである。震えるような旋律がまるで涙のひとしずくのように感じられることもある。音楽によって心が慰められないなら、音楽が幼児から老人までこれほど広く愛されることはないだろうし、音楽産業がこれほどに巨大なものになることもなかっただろう。

だが、音楽はまた政治的なものでもある。いのちや感情の弾みを本人もコントロールできないくらいに増幅するだけでなく、ひとになにかを激しく促したり、共通の気分のなかに浸らせたり、全体行動を強いたりするし、ときには労働の能率を上げるために導入されたりもする。

ファシズム的な集団の熱狂においても、力つきた敗残者の逃避行のなかでも、葬送の儀礼（御詠歌や読経）においても、Aを、最後の勇気を、深いBを内から絞りだそうと、ひとは声を響かせあう。音楽には、それほどにひとを揺さぶるところ、情動の深みから動かすところがある。ひとは失意のなかで涙とともにメロディーを口ずさみするし、気がつけばうきうきハミングしていることもある。言葉と同じく、それはひとを慰めもすれば<sup>そそのか</sup>唆<sup>そそ</sup>しもある。

とはいえそれはやはり、言葉と同じく、Xである。だから、語りあい、聞きあうところに自他の深い交感があるように、歌い、鳴らしあい、聴きあうところにも深い交感が起こる。カウンセリングがあるように、音楽によるセラピーというのもありうると、とりあえずは予想できる。

音はひとをどのような次元で動かすのか、それが気になっていたこともあって、音楽セラピーという、音をとおして他人に深くかわかってゆく行為に前々から関心をもっていた。

そんなおり、奈良市が全国ではじめて福祉事業の一環として音楽療法士の制度を設け、一九九五年からは音楽療法士の養成コースを開講し、修了した十三名のスタッフで活動を開始したと伝え聞いた。そして昨年末、およそ一年半にわたる養成コースを総括する書物が刊行された。

ここでは、市内の肢体不自由児施設、重症心身障害者施設、特別養護老人ホームにおける奈良市音楽療法推進室の試みについて、さまざまな角度から報告と検討がなされている。

わたしがこの本のなかで強く関心をひかれたのは、転職のかたちで音楽セラピーにかかわりはじめたスタッフ（元学校・幼稚園教諭、看護師、民俗芸能や音環境の研究者、ピアノ講師らである）の Y の過程である。実際に音楽を媒介にして子どもや老人に接するときの、さまざまなとまどいやためらい、ひどく落ち込んだときの迷いや、ふと思いがけないきっかけで解決の糸口が見つかった経験などの、率直すぎるほどの記述である。

はじめに述べたような音楽の両義性かんがみるとき、こうした心の揺れは痛いほどよくわかる。思いの深さと方法の不確かさとのちぐはぐな関係？

それでいいのである。セラピーの方法はそのつどだれかの〈苦しみ〉の場所に居合わせるなかで紡ぎだされるはずのものだからである。科学理論のテクニカルな応用はあらかじめ方法を確定したうえでなされる。セラピーはだれかの〈苦しみ〉の場所からそのつど方法を立ち上げる。だれにも適用可能な方法というのはありえないし、あってもそういう方法はほとんど効果をもちえないことは、現場のひとならすぐにわかる。

スタッフのひとりからご自身の臨床経験についてうかがう機会があった。

ある楽器を手にする、順番がくるまで待つ、前に出る……それだけでもたいへんなことなんだということに気づいたときのこと。拍手が大きな意味をもっていることを知ったときのこと。個人セッションで手応えがなくておろおろしているうちに子どもが熟睡しだし、泣きたくなったり、「にっこり微笑みながら寝ているのでいいんです」と施設の職員が声をかけてくれたこと。

人前にこわごわ出てゆき、そこでじぶんが他者にとって意味のある存在として認められたときめいた気分、他者を前にして

も気持ちが悪くなることのない安らいだ時間……。

ここには、鑑賞とはまったく異なる音楽とのかかわりがある。音を奏でる者と聴く者とがたえず入れ替わる。人間自身が楽器になつたり耳になつたり音のきめに触れる皮膚になつたりする。音の粒が他者とのそのつどの関係のなかに置き戻されるのだ。

いいかえると、ここには、だれかに向かつて切々と歌う、奏でる、からだを震わせるといふ音楽の原型がある。人びとのあいだである役を演じること、楽器を奏でること、戯れること、これら三つの行為が英語では同じプレイという語で表わされることには、とても深い意味がありそうだ。

スタッフのかたの話を聞きながら、わたしが死ぬとき、好きなCDをかけてもらうのもいいけれど、横でだれかにピアノを弾いてもらえればもっといいなと、ふと思った。

(鷺田清一「歌い、鳴らし、聴く音楽」)

問1 空欄 A ・ B に入る言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア 幸福    イ 自由    ウ 暴力    エ 哀悼

問2 空欄 X に入る言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 集団を熱狂させるときに有効的な媒体

イ 自分の意見押し通すときに必要な媒体

ウ 他人にかかわってゆくときの重要な媒体

エ 感情をコントロールするために重要な媒体

問3 空欄 Y には四字熟語が入る。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 試行錯誤    イ 泰然自若    ウ 盛者必衰    エ 独立独歩

問4 次の文章は、傍線部「音楽の両義性」を説明したものである。空欄 a ・ b に入る言葉を、本文中よりそれぞれ二文字で抜き出して記せ。

音楽には人の心を a する側面と、人々に行動を促したり、全体行動を強いたりする b 的な側面の、相反する側面があるということ。

問5 筆者の考える「音楽セラピー」とはどのようなものか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 音を奏でる演奏者と聴衆がたえず入れ替わる前衛的な音楽によって、他人に深くかかわってゆく行為。

イ 自他の境界を越えた協働的な関係の中から生まれ出てくる音楽によって、他人に深くかかわってゆく行為。

ウ 科学理論のテクノロジーカルな方法をあらかじめ確定した上で、他人に深くかかわってゆく行為。

エ 情動の深みから人々を動かすことのある熱狂的な音楽によって、他人に深くかかわってゆく行為。

## 第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点20点）

これまでの教育では、人間の頭脳を、倉庫のようなものと見てきた。知識をどんどん蓄積する。倉庫は大きければ大きいほどよい。中にたくさんものが詰ってあればいるほど結構だとなる。せっかく蓄積しようとしている一方から、どんどんものがなくなっていくはことだから、忘れるな、が合言葉になる。ときどき在庫検査をして、なくなっていないかどうかをチェックする。それがテストである。倉庫としての頭にとっては、忘却は敵である。博識は学問のあるシヨウコであつた。ところが、こういう人間頭脳にとっておそるべき敵があらわれた。コンピューターである。これが倉庫としてはすばらしい機能をもっている。いったん入れたものは決して失わない。必要なときには、さっと、引き出すことができる。整理も完全である。コンピューターの出現、普及にともなって、人間の頭を倉庫として使うことに、疑問がわいてきた。コンピューター人間をこしらえていたのでは、本もののコンピューターにかなうわけがない。そこでようやく創造的人間ということが問題になってきた。コンピューターのできないことをしなくては、というのである。

人間の頭はこれからも、一部は倉庫の役をはたし続けなくてはならないだろうが、それだけではいけない。新しいことを考え出す工場ではなくてはならない。倉庫なら、入れたものを<sup>②</sup>フンシツしないようにしておけばいいが、ものを作り出すには、そういう保存保管の能力だけではしかたがない。だいいち、工場にやたらなものが入って作業能率が悪い。よけいなものは処分して広々としたスペースをとる必要がある。それかと言って、すべてのものをすててしまつては仕事にならない。整理が大事になる。倉庫にだって整理は欠かせないが、それはあるものを順序良く並べる整理である。それに対して、工場内の整理は、作業のじゃまになるものをとり除く整理である。

この工場の整理に当ることをするのが、忘却である。人間の頭を倉庫として見れば、危険視される忘却だが、工場として能率をよくしようと思えば、どんどん忘れてやらなくてはいけない。そのことが、いまの人間にはよくわかっていない。

X 工場の中を倉庫のようにして喜んでいる人があらわれる。工場としても、倉庫としてもうまく機能しない頭を育ててしまいかねない。コン

ピーターには、こういう忘却ができないのである。コンピュータには倉庫に専念させ、人間の頭は、知的工場に重点をおくようにするのが、これからの方向でなくてはならない。それには、忘れることに対する偏見を改めなくてはならない。そして、そのつもりになってみると、忘れるのは案外、難しい。

例えば、何か突発の事件が起ったとする。その渦中<sup>③</sup>の人は、あまりのことに、あれもこれもいろいろなことが一時にサツトウする。頭の中へどんどんいろいろなことが入ってきて、混乱状態におちいる。茫然自失<sup>ぼうぼう</sup>、どうしていいかわからなくなる。これが「忙しい」のである。「忙」の字は、心(りっしんべん)を亡くしていると書く。忙しいと頭が働かなくなってしまう。頭を忙しくしてはいけない。がらくたのいっぱい<sup>④</sup>の倉庫は困る。

平常の生活で、頭が忙しくしてはいけない。人間は、自然に、頭の中を整理して、忙しくならないようになっていく。睡眠である。眠ってからしばらくすると、レム(REM)睡眠というものが始まる。マブタがピクピクする。このレムの間に、頭はその日のうちにあったことを整理している。記憶しておくべきこと、Y、倉庫に入れるべきものと、処分してよいもの、忘れるものとの区分けが行なわれる。自然忘却である。朝目をさまして、気分爽快であるのは、夜の間、頭の中がきれいに整理されて、広々としているからである。何かの事情で、それが妨げられると、寝ざめが悪く、頭が重い。朝の時間が、思考にとって黄金の時間であるのも、頭の工場の中がよく整頓<sup>⑤</sup>されて、動きやすくなっているからにほかならない。

昔の人は、自然に従った生活をしてきたから、神の与え給うた忘却作用である睡眠だけで、充分、頭の掃除ができた。ところが、いまの人間は、情報過多といわれる社会に生きている。どうしても不必要なものが、頭にたまりやすい。夜のレム睡眠くらいでは、処理できないものが残る。これをそのままにしておけば、だんだん頭の中が混乱し、常時、「忙しい」状態になる。ノイローゼなども、そういう原因から起る。かつては、忘れてはいけない、忘れてはいけない、と言っていられた。倉庫として頭を使った。中が広々としていたからである。このごろは入れるものが多くなったのに、スペースには限りがある。その上、倉庫だけではなく工場としてものを創り出さなくてははいけない。場ふさがり<sup>①</sup>しているのは不都合である。忘れる努力が求められるようになる。

これまで、多くの人はこんなことは考えたこともないから、さあ、忘れてみよ、と言われても、さっさと忘れられるわけがない。

Z、入るものがあれば、出るものがなくてはならない。入れるだけで、出さなくては、爆発してしまう。食べるものを食べる。消化して吸収すべきものを吸収したら、そののこりは体外へ排泄<sup>はいせつ</sup>する。食べるだけで、排泄しなければ、糞<sup>ふん</sup>づまりである。これまでの、倉庫<sup>2</sup>式教育は、うっかりしていると、この糞づまりをつくりかねなかった。どんどん摂取したら、どんどん排泄しないと  
いけない。忘却はこの不可欠な排泄に当る。目のかたきにするのは大きな誤りである。

勉強し、知識を習得する一方で、不要になったものを、処分し、整理する必要がある。何が大切で、何がそうでないか。これがわからないと、古新聞一枚だって、整理できないが、いちいちそれを考えているひまはない。自然のうちに、直観的に、あとあと必要そうなものと、不要らしいものを区分けして、新陳代謝をしている。頭をよく働かせるには、この「忘れる」ことが、きわめて大切である。頭を高能率の工場にするためにも、どうしてもたえず忘れて行く必要がある。

(外山滋比古『思考の整理学』による)

問1 二重傍線部①～⑤のカタカナは漢字に改め、漢字の読みはひらがなで記せ（漢字は楷書でいねいに書くこと）。

問2 空欄 X Z に入る言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じものは二度使わないこと）。

ア しかし イ あるいは ウ それで エ ところで オ すなわち

問3 傍線部1とあるが、作者がそのように考えるのはなぜか。次の言葉をすべて用いて、五〇字程度で説明せよ（句読点や記号なども含む）。

スペース 不必要 処理

〔解答欄〕55字

問4 次の文章は傍線部2について説明したものである。  に入る言葉を、本文中から一字で抜き出して記せ。

倉庫式教育とは、忘れることを恐れ、人間の頭を倉庫と見なして  ことを言う。

問5 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 忘れるというのは、頭をうまく機能させるために、不要なものを取り除く作業のことをいう。

イ コンピューターには、不要になったものを整理し、処分する機能が備わっている。

ウ コンピューターの出現によって、忘れるということに疑問が持たれるようになった。

エ 人間はレム睡眠によって頭の中がきれいに整理され、自然に忘れることができる。

オ 人間の頭は、倉庫としての役割を捨て、新しいことを考え出す工場でなくてはならない。

### 第3問

次の問い（問1～2）に答えよ。（配点10点）

問1 次の①～⑤のことわざ・慣用句を完成させるには、にどの言葉を入れるのが適当か。次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ① 元過ぎれば熱さを忘れる（苦しいことであっても過ぎ去れば忘れてしまうこと）  
ア 手て イ 足あし ウ 喉のど エ 首くび オ 腹はら
- ② の顔も三度（どんなに温和な人でも何度もひどいことをされると最後には怒ってしまうこと）  
ア 仏ほとけ イ 神かみ ウ 鬼おに エ 孔子こうし オ 地藏じざう
- ③ 坊主憎けりや まで憎い（あるものが嫌いだと、それに関係するものすべてが嫌いになること）  
ア 寺てら イ 数珠じゆず ウ 袈裟けさ エ 鐘かね オ 独鈷どっこ
- ④ に釘くぎ（全く無駄なこと）  
ア 粕かす イ 豆腐とうふ ウ 猫ねこ エ 餅もち オ 糠ぬか
- ⑤ 目が ている（良いものを見慣れていること）  
ア 冴さえ イ 萎なえ ウ 肥こえ エ 増ふえ オ 燃もえ

問2 次の文章は、お世話になった相手へのお礼の手紙である。この文章について、(1)・(2)の問いに答えよ。

X 今年も残すところわずかとなりました。

さて、先日はご自宅にお招き下さり、ありがとうございます。興味深いお話を聞く<sup>1</sup>ことができ、またおいしいお菓子も<sup>2</sup>もらうなど、大変楽しい時間を過ごすことができました。田中様には、日ごろよりお世話になりました。心より感謝しております。

楽しいお招きに御礼申し上げますとともに、田中様のますますのご

Y

をお祈り申し上げます。

Z

令和七年十二月十六日

山田太郎

田中次郎様

(1) 文章の空欄 X Z に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

ア 健勝 イ 拝啓 ウ 足下 エ 御中 オ 敬具

(2) 傍線部1・2の表現を敬語に直せ。